

原の辻遺跡で格子の叩き目のある器台発見！

東アジア考古学研究室 古澤 義久

2011年東アジア考古学研究室では、これまで原の辻遺跡で調査された遺物のうち未報告の資料を再点検しました。その結果、興味深い資料がみつかりましたのでここで紹介したいと思います。図1・写真1の土器は2002年度調査八反地区3号溝(弥生時代終末～古墳時代前期)で出土した器台(別の器を載せる台)ですが、表面に弥生土器ではあまりみられない格子目がみられます。これは土器を叩いて整形したときについた痕跡です。そのほかの特徴は内面のハケメ調整(木の板で擦る調整)など他の弥生時代の器台と変わるところはありません。

類似した土器として糸島半島に所在する福岡市西区元岡遺跡で出土した器台が早くから知られており、福岡大学の武末純一教授は叩き目の由来は韓半島にあると指摘しています。武末教授は叩き目以外の要素は全て弥生土器で、叩き目という一部の要素だけを借用した事例であるとし、このような土器は弥生土器の中で一般的なものとならなかったため、韓半島から試験的に格子叩き目の手法が採用されたが、定着しなかった文化受容の失敗例であるとしています(武末1991)。

また韓半島の叩き目よりも格子の規格が大きく、格子目叩きという技術のみが採用されているようです。近年、元岡・桑原遺跡群では九州大学の移転に伴い大規模な調査が行われていますが、格子叩き目のある弥生土器が多数出土しています。器台(図2)だけでなく、甕、壺、碗、脚附土器など多様な器種がみられます(米倉編2012)。格子叩き目のある弥生土器の分布の中心地は元岡遺跡をはじめとする糸島地域であったとみられます。

原の辻遺跡では1000点を越す点数の韓半島の土器が出土していることから韓半島との深い交流が行われていたことがわかります(古澤2010)。しかし、私は今回の資料は韓半島との交流の結果、原の辻で生まれたものではなく、むしろ糸島地域との交流の結果、もたらされたり、作られたものだと考えています。杵岐島では山中遺跡(白石編1999)でも斜格子叩き目のある大型の壺が出土していますが、これも同様に糸島地域との関係を考えることができます。

白石純悟編1999『山中遺跡』郷ノ浦町文化財調査報告書第1集

武末純一1991『福岡市元岡遺跡の器台』『交流の考古学』

古澤義久2010『杵岐における韓半島系土器の様相』『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討』

米倉秀紀編2012『元岡・桑原遺跡群21』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集



写真1 原の辻遺跡出土器台

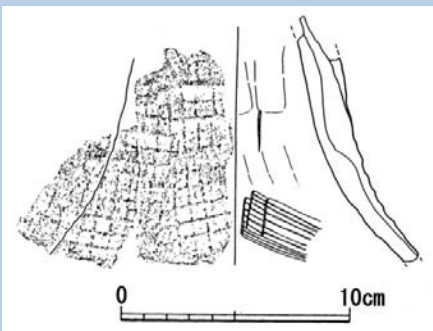


図1 原の辻遺跡出土器台

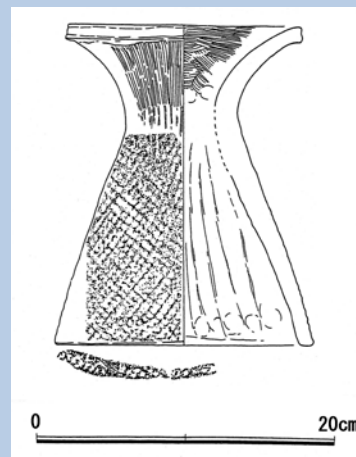


図2 元岡・桑原遺跡群出土器台



“ブヨブヨ木器の処理法とは？”

～出土木製品の保存処理方法～

遺跡から出土した木製品(木器)は、通常木全体に水が浸透してブヨブヨの状態になっています。これをそのまま乾燥させると、原型が分からなくなるくらいに変形してしまうことがあるため、取り上げた後はすぐに水漬けした状態で保管します。

しかし、水に漬けたままでは展示に使えません。そこで、木器の保存処理方法の一つとして“PEG含浸法”という処理をします。これは木に染み込んだ水をPEG(ポリエチレングリコール)という薬剤と置き換える処理方法です。

PEGは常温では粉末状の薬剤ですが、60度で液体になるという性質を持っています。その性質を利用し、木器を“PEG含浸装置”という装置に入れて60度まで加熱した上で、PEGを投入して水と置換していきます。約10ヶ月程時間をかけて、PEGの濃度を少しずつ上げ、100%の濃度にします。

PEGと水が完全に入れ替わったら、取上げです。まず最初にお湯で表面についた余分なPEGを洗い流します。その後水気をよく拭き取り乾燥させ、木器内部まで浸透したPEGを凝固させます。最後に木器の表面についたPEGをアルコールで洗浄すれば保存処理完了です。

PEGがたっぷり詰まっている木器は強化されているため、乾燥しても壊れず、割れてしまった個所の修復や接合ができるようになり、展示にも活用できるようになります。



PEG投入作業



REGIに浸けこんだ状態の木器



木器の洗浄と拭き取り作業



アルコールでの洗浄作業

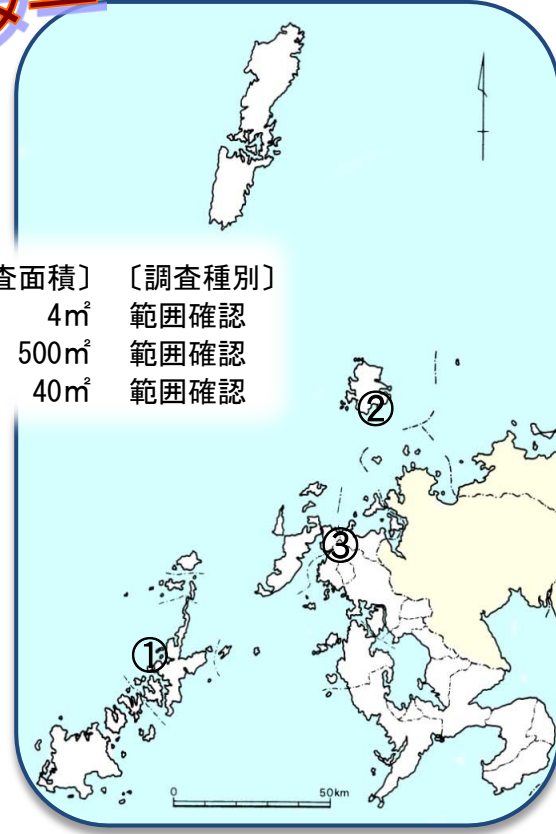


バラバラになった木器(鍛先ではないかと考えられています)のPEG処理前と処理後



長崎県埋蔵文化財センター 遺跡発掘調査情報

〔遺跡名〕	〔調査期間〕	〔調査面積〕	〔調査種別〕
①小浜遺跡	平成25年9月24日～平成25年9月27日	4㎡	範囲確認
②原の辻遺跡	平成25年10月17日～平成25年12月27日	500㎡	範囲確認
③小手田遺跡	平成26年2月3日～平成26年2月14日	40㎡	範囲確認



小浜遺跡 遠景



小浜遺跡 現代遺構検出状況



小浜遺跡 現代遺構完掘状況

おばま 小浜遺跡(新上五島町)

新上五島町今里郷(中通島)にある小湾に面した斜面から平坦地に位置しており、縄文時代の遺物包含地とされています。以前は箱式石棺墓という墓があったそうですが、現在では確認できません。町道の新設工事予定範囲が遺跡の東端部を通るため、長さ30m×幅6～8mの範囲に4㎡の試掘坑を2箇所設定し、それぞれ精査を行いました。調査の結果、現代の耕作土、また道路用の埋め立て土のすぐ下に、風化した砂岩の固い岩盤層が見られ、遺構や遺物は確認されませんでした。

工事予定区域には、丘陵斜面脇の砂岩の岩盤をくりぬいて、おおよそ一辺1.5m、深さ1.5mの方形または円形の土坑が7基見られました。この土坑は、残飯、し尿、あるいは魚類等を利用して肥料を作るために掘られた穴、またはサツマイモを保存するための芋釜(いもがま;芋の貯蔵穴)であったとされています。

調査地の丘陵斜面上段の狭い平坦地は耕作地であったようで、こうした耕作地の地味向上のための当時の知恵、また食料を貯蔵して長く日持ちさせるための当時の工夫を示すものと言えます。

こてだ 小手田遺跡(平戸市田平町)

過去の分布調査では縄文時代の遺跡とされています。おおよそ南から北に伸びる丘陵が遺跡に指定されており、この遺跡の北約500mには里田原遺跡という弥生時代の有名な遺跡があります。東西に長さ400m、幅約14mの道路建設が予定されており、この中に4㎡(2m×2m)の調査区を10か所設けて調査を行いました。調査範囲の丘陵東側では、削平が進み遺物包含層が確認できませんでしたが、丘陵西側には中世の遺物を含む土層の広がりを確認することができました。



小手田遺跡出土の遺物



小手田遺跡 発掘調査風景



試掘坑TP2 土層観察

はるのつじ 原の辻遺跡(壱岐市)

今年度は昨年度に引き続き幡鉾川の北側の低地である川原畑地区の調査を行いました。今年度の調査では河川跡や多くの土坑(地面に掘りこまれた穴)群のほか川原畑地区では初めてとなる竪穴建物跡が発見されました。竪穴建物跡はこれまで丘陵部で多く発見されてきましたが、低地部で発見されるのは珍しい事例といえます。この竪穴建物跡の中央では焼けた土がまとまって見つかり、炉の跡だったと考えられます。興味深いことに、この炉の跡に底の部分の打ち欠いた壺が置かれていました。壺は火にかける器ではないので、炉を使わなくなったときに、お供えたものかもしれません。竪穴建物跡では土器や石器のほか鉄器も出土しました。このほか弥生時代よりも古い地層から縄文時代草創期の石器や、更に古い約40000年前の自然の木も発見されました。



原の辻遺跡 竪穴建物跡



原の辻遺跡 炉に置かれた壺